日英シンポジウム「更年期新時代を語る」

〔要　旨〕

シンポジスト

アン・パーカー氏　〈産婦人科医師・家族計画専門〉

ジョン・ジェンキンス氏〈WHC（ウイメンズ・ヘルス・コンサーン）創始者〉

石塚　文平　氏　〈聖マリアンナ医科大学産婦人科学教室講師〉

堂園　涼子　氏　〈インターナショナルメディカルクロッシングオフィス院長〉

1993. 9. 21　(火)

於　豊島区男女平等推進センター　エポック10

1993年9月21日、英国で更年期問題に取り組んでいるふたりの女性が来日した事を契機に、豊島区男女平等推進センター主催による日英シンポジウム「更年期を語る」が開かれた。英国側からは、長年女性の健康問題に取り組み、自らもホルモン補充療法を実践しているMrs. Joan Jenkinsと、家族計画や性の問題を扱う公的ユニットに勤務されているDr. Ann Parkerのおふたり、日本側からは聖マリアンナ医科大学で更年期問題を扱っておられる石塚文平医師、都内で開業し独自のシステムで全人的医療をめざしておられる堂園凉子医師のおふたりが、シンポジストとして話され、日英それぞれの更年期医療の現状が紹介された。このシンポジウムは豊島区広報や新聞などで紹介され、約150人の一般の方々の参加があり、活発な質疑応答が行われた。

Mrs. Jenkinsの話は、更年期の問題は、女性の寿命が延長し閉経後30年も生きるようになった20世紀の新しい問題であることの認識から始まった。月経周期のメカニズムとその意義、閉経に伴うホルモンバランスの変化が説明され、これによっておこる更年期症状—のぼせ、発汗、情緒の変化や精神機能の低下—などが紹介された。Mrs. Jenkinsはさらに、エストロゲンの減少によって膣や尿道におこる具体的な変化とそれによっておきる性交障害や尿失禁、さらにエストロゲン欠乏の長期的障害である骨粗鬆症や血管疾患についてもわかりやすく説明された。骨粗鬆症についてはそのリスクファクターが詳しく述べられ、女性が自分で骨粗鬆症のリスクを判断したり、骨粗鬆症を予防するために生活を改善する方向が示された。最後にホルモン補充療法の効果と具体的な服用方法が話されたが、Mrs. Jenkinsはホルモン補充療法の選択やその継続期間について、女性自身が主体性をもつべきであることを強調された。

Dr. Parkerは、自身の経験を踏まえ、更年期の性の問題について話された。彼女はこの時期の性の問題が単にエストロゲンの欠乏のみによるものではなく、家庭を含めた社会の問題、心身の健康についての不安、空の巣症候群やアイデンティティーの喪失といった心理的問題などが複雑に絡み合った結果としておこりうるものであること、さらにはその女性が生きている文化的背景も影響を与えるものであることを話され、心身相関によっておこる具体的な症状も示された。このような症状に対する対応としてDr. Parkerは、時間をかけて問題の原因を話し合うこと、男性の性行動についても理解し、夫婦でこの問題に取り組む必要があることを指摘された。英国においても性の問題はまだまだオープンに話されることは少ないようだが、Dr. Parkerは正しい知識を持ってこの問題に取り組むことにより、閉経後のQuality of Lifeがさらに高まる可能性があるとまとめられた。

石塚文平は、最近の日本における更年期についての知識の普及に対して医療体制が追いついていないこと、更年期の問題は男女の問題であることなどを前置きし、この時期の女性が気軽に相談に行ける産婦人科「美容院構想」を提案された。そして最近氏の大学に開設された「アゼリア外来」が紹介され、この外来の機能として“啓蒙”と“予防医学的観念”の重要性を指摘された。最後にこのような概念を普及させるためには、医師自身の教育も欠かせないものであることが指摘された。

堂園凉子医師は、日本でも更年期の問題が医療の対象として認められつつある状況を評価した上で、患者のニーズに答えることのできる施設が不足していることについて話された。堂園医師は、ひとりの医師が患者を統一的に見られるという点では個人病院が優れているが、複数の専門領域にまたがる問題の場合は大病院に利点があるとし、今後は大病院と中小病院がネットワークを作って患者のニーズに対応したシステム作りに取り組む必要があると述べた。また更年期医療は、患者中心の新しい医療体制を考えるうえでひとつののモデルになり得るテーマであり、この問題を契機に医療における意識改革が進むのではないかという展望が示された。最後に、新しい医療体制を作るためには、自分自身が自分の健康に関心を持ち、自分に必要な医療施設を選択するという、患者側の意識改革の必要性も指摘された。

シンポジウムのお話の後、参加した一般の方々から質疑が出されたが、その内容は最近話題のホルモン補充療法の継続期間や副作用の問題、男性更年期の有無、更年期障害に対するホルモン補充療法以外の対応についてなどであった。シンポジウム終了後も個別に質問する参加者も多く、更年期の問題に対する関心が高いことがうかがわれた。

検索用テキスト　OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

日英シンポジウム「更年期新時代を語る」